

ほんの少しのことで...ほんの一瞬のことで、気持ちが癒されたり、その場の状況が変わったりすることがあるものです。今廊下の上田先生が川から拾いきれいに磨いてくれた30cmくらいの高さの太い丸太がスツールの様に置かれていて、用事から用事へ移動する間に、ふと呼ばれるようにその上に立ちたくなくなります。いつもと目の高さが何十センチ異なるだけで、世界が見違えて感じられます。しばしその景色に見とれて、心の中で深呼吸....次の仕事へ向かえます。

何か事がうまくいかなかったときに、空を見上げて「ほん」と手をひとつ打って、「よし」と仕切りなおすような儀式と入っているかもしれません。

「市中の山居」ということを、お茶のお家元から教えていただいたことがあります。あわただしく、呼吸をつまらせがちな社会時代の中でも、(中だからこそ、なおのことかもしれませんが)、自然ゆたかな山中にいるような気持ちで過せる、特別な時間を短くても確保し、大切にすることなのだと思います。

雨あがり、水たまりがいっぱいの庭へ、子どもたちが素足で飛んでいきました。「服よごさないでね!」「洗たく物が乾かなくて」「雨降りば、うとうしいわ」...と、大人はそれがもたらす「困ること」に目が向きがちですが、子どもたちは雨とももっとお友だちみたいです。果敢に雨中に飛び出していったり、水たまりに手足をつっこんで「どろどろとろりんちゅ」と遊んだり、傘をぐるぐる回したり先で地面に絵を描いたり...と、今の瞬間を雨と共有している感じです。

間もなく雨の季節がやってきます。

確かに不便もいろいろありますが、時には雨のパラパラの音に静かに身を傾けたり、落ちてくる雨つぶや雨が揺らす葉っぱのふるふるを、少しの間眺めていたり...、例えば雨の趣きを感じるひと時を市中のバタバタの中で始めてみるのもよさそうです。

マイナスと思いがちな出来事や状況につかっても、ほんの少しの心の持ちようで、そこにのどかさとうるおいを、もしかすると小さなゆたかさが生まれてくるのではないのでしょうか。

生活の中のそのような時間を通して、誰かの心の声がもう少し聞こえてくるかもしれません。

雨の季節にお茶一服のひと時が、自分と内なる自分とを、そして人と人とをつなぎ、今をさらにうれしい「今」へと導いてくれる大切なひと時になるような気がしてなりません。

園長 針光 泰雄